



Title	崔南善論 : 植民地期朝鮮における檀君論とナショナリズムの創出
Author(s)	全, 成坤
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45703
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	全 成 坤
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 9 1 2 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 17 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	崔南善論－植民地期朝鮮における檀君論とナショナリズムの創出－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川村 邦光 (副査) 教 授 杉原 達 助教授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、朝鮮総督府・日本帝国の植民地支配下における、崔南善の思想・活動を考察する。崔は 3・1 運動の独立宣言書を起草して逮捕され、懲役に服した後、雑誌や新聞を創刊し、ジャーナリストとして活躍し、さらに朝鮮の歴史を古代まで遡って研究した歴史学者である。崔が現在でも韓国・北朝鮮の民族主義イデオロギーの中核を占めている「檀君」神話を学術的に究明し、それを被支配者・被植民者の文化的アイデンティティとして樹立しようとして苦闘していったことに焦点を絞って、崔の著作を当時の政治的状況を踏まえて読み解き分析することを課題としている。

序章では、先行研究を踏まえて、本論文での問題意識と方法が提示されている。崔は、解放後、「親日者」として批判されてきたが、民族主義＝善、親日＝悪というステレオタイプ化された二元論的思考によって捉えるのではなく、植民地の状況と支配イデオロギーとの関係において、崔南善の思想・活動を位置づけ、崔がこの時代の状況をどのように受けとめて、支配イデオロギーに向き合い、自己の思想を構想し創出していったのかを明らかにすることが課題として設定される。第 1 章では、崔の創刊した雑誌『少年』の論説を分析し、崔が地政学的視点から、朝鮮の文化的な優位を主張して、独自の朝鮮半島論を展開したことを明らかにし、また『少年』を言論交換の場とし次世代を担う青少年たちの養成を目指したことを指摘し、ジャーナリストとしての崔を描き出している。第 2 章では、崔が 1924 年に創刊した『時代日報』を取り上げ、崔の執筆した論説から、共産主義・国際主義の影響のもとで、朝鮮の独立を射程に入れて、民族を超えた被抑圧民族・労働者階級・被抑圧者の国際的な連帯と植民地解放を主張し、朝鮮総督府の施政、植民地支配に対する批判を検閲・発禁にもかかわらず展開したことを指摘する。第 3 章では、崔が日本人学者の日鮮同祖論、また檀君否定・抹殺論を批判し、これまでの檀君神話の解釈を一新させて、植民地支配下における朝鮮ナショナリズムの形成に大きく寄与したことを指摘している。第 4 章では、崔の「薩満教箭記」を取り上げ、東北アジアの「薩満教」つまりシャーマニズムが朝鮮の古代宗教の基盤となっており、檀君が「巫君」であることを究明していったことを緻密なテキスト分析を通じて指摘し、崔が日鮮同祖論に与していたのではなく、それを乗り越える視座をもち、新たな檀君像を提示したことを明らかにしている。第 5 章では、崔が主著「不成文化論」において構想した東アジア文化圏論は、日本の大東亜共栄圏とは異なり、植民地支配下での「屈折の中で考え練られた論理」をもち、朝鮮の文化的世界を保持しようとする、崔の「精神的亡命」の成果であると評価している。崔は満州建国大学の教授として招聘されたが、論文や講義で満州国の建国理念「民族協和」を逆手にとって、朝鮮民族の「精神の原点」

である檀君神話を力説した。そこに、「内鮮一体」の朝鮮と「民族協和」の満州の間で、崔が独自の思想的位置取りをするためにいかに苦闘したのかを正当に評価すべきことを指摘する。第6章では、日本帝国の敗北、朝鮮解放後、崔南善が「反民族行為者処罰法」によって逮捕され、「親日者」とされたが、この「親日」概念の創出過程を分析し、親日者としての崔、また「檀君古記箋釈」から檀君論を検討し、崔の再編成した檀君論が現在の朝鮮の文化アイデンティティ、また民族主義・ナショナリズムの源泉となる檀君神話として存続していることが明らかにされている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、まず第1に、朝鮮総督府の支配下において、言論活動および学術研究を遂行した、崔南善の初めての総合的研究として、韓国・日本において評価されるだろう。先行研究では、崔が親日者・反民族主義者か、反日者・民族主義者かといった二項対立の視点から、崔の業績や活動が断片的に研究され評価されることが多かった。だが、本論文では、こうした硬直した解釈枠組みや価値判断に依拠せずに、崔の新聞論説や学術雑誌の論文、著書などのテキストを朝鮮総督府・日本帝国による植民地支配という歴史的状況をコンテキストとして読み込んでいくという方法をもって考察しようとする姿勢が貫かれている。すなわち、ひとつのテキストが多くのテキストの参照・引用から成り立っているテキストの重層性を、日本帝国・朝鮮総督府と朝鮮、また朝鮮内部における多面的な支配・被支配の状況として歴史的に存立しているコンテキストの重層性を踏まえて分析している。それは膨大な韓国語と日本語の資料文献を参照し分析することによって成し遂げられ、韓国の日本研究者や日本の韓国研究者にとって、裨益するところは大きくあると考える。第2に、本論文では、崔が植民地支配下の政治的・文化的な状況に拘束されながら、ジャーナリストまた歴史家、思想家として、朝鮮民族の現在を見据えつつ未来を展望して、総督府と対峙しながら、植民地支配を批判し、朝鮮民族の核となる檀君思想を構築したことを明らかにし、たんに親日者・反民族主義者と裁断できない崔の苦渋に満ちた位置、そしてその歩みを丹念に考察していったことは特筆に価しよう。崔の思想的遍歴は強権の朝鮮総督府の思想管理・支配に対処していったことによるばかりでなく、朝鮮民衆の現状に対する痛切な認識において展開されたことを指摘し、植民地支配下・体制内における知識人の知的活動の困難さを細やかに発掘し浮き彫りにしているのである。第3に、本論文は植民地解放後から現在にいたる韓国社会を絶えず見据えながら考察し、現在の韓国において重大な問題となっている親日問題に関する議論、また脱植民地の思想的課題に大きな問題提起となって寄与し、再考を迫るものである。それはまた、過去に朝鮮の植民地支配を行なった日本に対しても問いかけるものともなっている。本論文では、崔の著作の考察を中心にして、その思想展開が深く明らかにされているが、当時の状況における他の朝鮮の言論人との関わりや相違、また言説空間における崔の位置づけに関する議論が不十分であったといわざるをえない。そして、崔が植民地支配下において朝鮮総督府との関係で行なった活動を検討する作業が課題として残されている。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。